

## 思春期の高機能広汎性発達障害児における社会情動プロセスの特徴

—P-Fスタディを用いて—

数 由 都

### 問題と目的

現在、発達障害臨床の現場では、高機能広汎性発達障害（High-Functioning Pervasive Developmental Disorders:以下HFPDD）の子どもの存在が広く認知されている。その中で特に懸念されているのは、診断の遅れがその後の適切な発達支援を困難にしまう可能性や、二次的障害を抱えてしまうことが指摘されている。

近年では、PDDの社会性の問題に焦点をあてている研究が多い。本研究では、HFPDD児の社会性の問題を検討するにあたり若本・吉田（2011）のPDD児・者の社会情動プロセスに注目する枠組みに準拠する。

若本・吉田（2011）は、昨今のPDDに関する先行研究の概観結果からPDD児・者の社会性の問題が生まれるプロセスを推測している。情動知覚プロセスは、自己、他者の情動を知覚するプロセスを目指す。続く、社会情動認知プロセスは、社会的相互作用およびその場面における情動の把握、その判断などの過程である。診断基準等で症状・問題行動とされる、他者の情動や意図がわからない、場の空気が読めない、自分のこだわりに関じこもるなど特徴的なプロセスの根底には、上述した情動知覚プロセスが存在し、PDD特有の知覚がPDD特有の社会的情動認知プロセスの基盤になると見なされている。

そこで、本研究では、思春期のHFPDD児における社会性の問題を社会情動プロセスという観点から検討するにあたり、他者との社会的相互作用場面が図式化されているP-Fスタディを用いて、社会情動プロセスごとに追加質問を行うことにより、HFPDD児の社会情動プロセスの特徴的様相を明らかにする。その際、PDD児に対して実施したP-Fスタディでは、反応内容だけ見ると、反応語自体は、文章表現としておかしくないが、反応が相手の発した言葉に対する応答として、ふさわしくない場合や、場面の無理解、あいまいな表現の為、複数にスコアが考えられる場合などである（秦，2007，2010）。反応がその場に合ったUスコアが顕著に見られた（秦，2007；石坂ら，1997；又吉・村山・山田，2002；田辺・田村，

1999）との指摘を踏まえ、Uスコアに注目して検討を進めることとする。

### 方法

**研究協力者** HFPDDの診断を受けている中学生3名。

**研究期間** 2011年11月～12月

**実施場所** 本大学院心理臨床相談センター施設内の第2相談室

**使用した道具** 1)研究協力者の生活年齢に合わせて、P-Fスタディの青年版を選択した。

2)表情カード。情動知覚プロセスの追加質問に用いるもので、怒り（少しムツとする、苛々する、怒り全開の3段階）・笑顔・悲しみ・不安・恐怖・意地悪な表情の描かれた9枚のカードを用いた。

**追加質問** 情動知覚プロセスに対する質問として、文脈に応じた表情認知ができているか、選んだ表情はどんな意味づけで用いられたのかを確認した。社会的情動認知プロセスでは、絵と文章から、どの様に場面を読み取ったのか、両者の内的な反応を、どの様に認知あるいは想像したのか確認した。分析の手順としては、1)実施したP-Fスタディ反応を、標準法のスコアにUスコアを加えて、スコアリングと分析を行い、2)24場面すべての回答に対して、4つの追加質問を行った。3)追加質問に解する回答を整理していく中で、Uスコアが社会情動プロセスにおけるどこで現われるのか、またそれぞれのUスコアにはどのような特徴があるのかを、PDDの障害特性と関連付けながら考察した。

### 結果と考察

#### 1. HFPDD児のP-Fスタディ

**AのP-Fスタディ結果** 場面2の「で、いくらなの？」という回答からは、花瓶を大切にしている人の気持ちを置き去りにし、物を返す事で解決しようとしていることから、対人相互作用場面において、他者の気持ちを考えられず、自分がした事への対処は行うが、自己に非があるとは考えていないことが想像される。また、追加質問後は、他責のE-Aの高さが目立ち、因子は/E/が高かったことから、フラストレーションの原因を他者に求めて、他者に攻撃を向けている傾向があると考えられる。また、/E/反応が多く見られたことから、

追加質問前は、自身の評価が下がることを恐れ、事を荒立てない様な反応を表出していたが、他者に対する攻撃的な気持ちが存在することがわかった。

**BのP-Fスタディ結果** 追加質問前では、他責因子がほとんど見られず、/M/やI'//, /I/, //mが標準より高くなっていたことから、他者に向けられる攻撃までも自己に向けたり、自他どちらにも向けず、避けようとするとする傾向にあった。さらに、追加質問前後を通して、フラストレーションの原因が他者にある場合「わかった」と簡素な回答が多く見られたが、Bは、他者の気持ちを配慮したり、自己に非があることを理解しているわけではないことが明らかになり、Bは、社会的習慣に従って、対処や解決をはかったり、自己解決しようとする傾向にあると考えられる。

**CのP-Fスタディ結果** フラストレーションが生じた事態に対し、不快や不満を向けると考えられた。相手に対し、自己主張できず、相手との対決を避ける為、他者を許容したり、社会的習慣に従って対処や解決をはかったり、フラストレーションを軽視する傾向にあったが、不快や不満を相手に対して感じていたことがわかった。反応と言う形で相手に直接的に自分の感情を向けることはないが、自己の中では、別の感情を抱いており、他者の態度を伺いながら、自己の感情を表出していると考えられる。

## 2. HFPDD児の社会情動プロセス

### Aの社会情動プロセスの追加質問に対する回答

Uスコアは、追加質問前は14場面で見られたが、追加質問後は、11場面に減少した。自分の経験をもとにしか、場面の理解や、人物の内的反応を想像することができない。さらに、場面や人物の内的反応を理解することが難しいと考えられる。

また、場面9では、左の人物の気持ちを「文句言われたらだるい」と強気であったが、表情は恐怖を選択していることから、表情と内的反応が一致してないことがわかった。このことから、表情から、他者の気持ちを理解する事が難しく、他者が意図していることが読み取れない為、自分の表情も、感情が生じていない無表情を選ぶ事が多かった。

### Bの社会情動プロセスの追加質問に対する回答

場面14では、「すっかり忘れてました」と回答しており、追加質問後では、“やってしまった” “10分前なのに忘れてた” と回答している。このことから P-Fスタディに示された場面から、文脈が読み取れず、B独特の解釈により場面が設定されていた。さらに、読み取れていない場面の

中から、第三者の存在を認識できていないことが考えられた。さらに、社会情動知覚プロセスでは、フラストレーションをおこしている右の人物において無表情カードを多く選択していた（場面4, 15, 20）。無表情に対する意味付けは「普通にしている」と回答していることから、他者の気持ちを考え、許容したり、謝罪したりするのではなく、義務の様な感覚で許容や謝罪していると考えられることから、他者の気持ちを表情から読み取れていないと考えられる。また、場面4, 7, 15, 20, 21では、反応内容だけ見ると、その場にあった回答が得られていた様だが、追加質問する事で、理解できずに適切に見える回答をしていたことが明らかになった。

### Cの社会情動プロセスの追加質問に対する回答

場面14では、追加質問前は「すみません」と回答していた。追加質問をすることで、C自身が時間に遅れてしまったと場面を理解していることがわかった。このことから、第三者の存在が理解できず、C独特の解釈により、場面が設定されていた。社会情動知覚プロセスでは、フラストレーションを起こしている右の人物の表情に対し、恐怖や不安、怒り全開といった感情を選択することが多かった。場面24において、「左の人の前で怒ると、左の人がしょんぼりするから怒らないが、本当は、怒っている」と回答した。不快や不満を感じていながらも、他者からの評価が気になり、表出出来ない為、自己の感情と表出された感情が異なっていた。

## 総合考察

**3人に共通して見られたこと** 先行研究の指摘の通り、3人全てにおいてUスコアが見られた。また、場面14において、第三者の存在を理解できず、それぞれの経験をもとに、独特の解釈により、場面が設定されていた。BとCに関しては、その場にあった回答がされていた様に思われたが、追加質問することにより、場面理解ができていないまま、一見適切に見える回答をしていたことが明らかとなった。

上記に示した様に、P-Fスタディを用いて、社会情動プロセスの検討を行った結果、どの様なプロセスをたどり、HFPDD児の問題が表出されているのかが明らかにされた。さらに、P-Fスタディを用いたことで、日常のどの様な場面で、HFPDD児の社会性の問題が現れやすいのかに対する示唆が得られた。その為、心理的支援を受けにくい現状にあったHFPDD児に対し、個人に合った、より適切な支援を受けられることへ繋がると考えられる。